

聖書：ヘブル 2：14～18

説教題：あわれみ深い、忠実な大祭司

日時：2012年12月23日

皆さんは「クリスマスとは何ですか」と聞かれたら、何と答えるでしょうか。一般的には、神の御子イエス様が人となって私たちのところに来て下さった出来事と答えるでしょう。私たち人間の側からこのように考え、答えることはそれほど衝撃的でないかもしれませんが。しかし神は何と聖なるお方かということ、そして私たちは何と小さく、取るに足りない存在であるかを十分にわきまえるなら、これは何度考えても信じられないような出来事です。なぜならこれは、世界万物を造られた創造者が、私たちと同じ一個の人間になられたという出来事だからです。しかしイエス様はそのことを恥とはなさらないで、クリスマスのこの時、私たちのところに来てくださいました。11節に「主は彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで」とあります。12節でも私たちを「わたしの兄弟たち」と呼んでくださっています。そして14節前半に「ここで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。」とあります。「子たちはみな血と肉を持っている」という言葉は、私たちがもともとその状態にあることを示す書き方になっていますが、主について言われている「これらのものをお持ちになりました」という言葉は、主がある時点からそれをご自身の上にとられたことを示す書き方になっています。つまり主は人として生まれる以前から存在していましたが、ある時点で、血と肉という私たちと同じ性質をご自身にとられたのです。

このクリスマスには明確な目的があったことが今日の箇所を示されています。大きく2つのことを見て行きたいと思います。一つ目は14節後半～15節：「これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放して下さるためでした。」ここにイエス様の人としての誕生は、最初から「死」を目指すものであったことが示されています。イエス様は血と肉を持つことにおいて私たちと一つになってくださっただけでなく、死にまでも進み、その死を通して悪魔を滅ぼし、私たちを死の恐怖から解放して下さった。私はこの意味についてある時、新しく教えられたことがありました。それはバッハのマタイ受難曲のDVDを見た時のことです。イエス様が「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」と叫んで、息を引き取った場面直後のコーラルは、以下のような言葉になっていました。「いつの日か、私が去り逝く時、私から離れないで下さい。私が死に直面する時、あなたは私の盾となって下さい。恐怖と不安の闇が私の心を覆う時、私を恐ろしい淵より救い出して下さい。あなたが先駆けて味わった不安と苦痛の力によって！」私はこの場面で何かが歌われるなら、それはイエス様に向かって「私の代わりに死んでくださり、ありがとうございます。あなたの死によって私は救われました。」というような賛美だろうと思っていました。ところが今の歌詞は、自分が死ぬ時の慰めとして歌っています。私たちは死を恐いと思いつつも、普段はそんなにこのことを考えて生活してはいません。そういう私たちは、普段はイエス様の十字架の死のありがたさを本当には良く分かっていないのかもしれない。私たちが死を恐ろしいと思うのは、やはり自分の死期が迫っていると感じる時でしょう。あまり目を向けて来なかった死が、突然現実問題として自分に迫って来ます。一体その死はど

んな状態なのか、誰か経験者から教えてもらうことはできません。私たちはこの世で人々と楽しく生活していますが、死の時は一人ぼっちでこれに向かい、一人でこの世を出て行かなければなりません。その先に何があるのか、何が自分を待っているのか。果たして私たちはその試みに耐えられるでしょうか。しかし先のコラールに示されているメッセージ、そして今日の箇所にも示されているメッセージは、主はクリスマスの時に私たちのところに来られただけでなく、私たちと同じ死にまでも下ってくださったということです。私たちと同じ血と肉を取っただけでなく、墓の中まで降りて行って下さった。これを知る時、私たちには大いなる慰めが与えられます。私たちがやがて迎えるであろう最も辛い死においても、イエス様が一緒であると知るからです。そしてイエス様はただ私たちと運命を共にして下さっただけでなく、ご自身の勝利をもって、そこも恵みのあふれる場所に変えてくださった。14 節に「その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし」とあります。イエス様の死と私たち人間の死とは根本的に違うところがあります。それはイエス様は罪がない方であり、死ぬ必要がない方だったのに、死なれたということです。イエス様はその死において、私たちの上に臨むべき呪いをご自身に引き受けてくださったのです。そして死が持つ毒を全部飲み干してしまわれ、死の力を滅ぼし、それを無力なものとした。従って今や死という領域さえも、サタンが支配するところではなく、イエス様が支配するところ、イエス様の恵みの香りが充満している所となった。それゆえ死の恐怖につながれて奴隷状態にあった私たちは、そこから解放されたのです。クリスチャンはもはや死を恐れなくて良いし、恐れてはならない。ルターはこう言っています。「死を恐れたり、死ぬことを嫌だと思ふ人は、十分な意味でのクリスチャンではない。と言うのは、死を恐れている人は、まだ復活への信仰に欠けているということなのだから。その人は来たるべき生より、この世の生を愛している。喜んで死ぬことのできない人は、クリスチャンと呼ばれるべきではない！」 カルヴァンはこう言っています。「死を恐れないことによって心に平安を保つ、ということができない人は知るべきである。自分はキリストへの信仰において十分には進んでいない、と。度を越えた恐れはキリストの恵みを良く知らないことから起こって来る。従ってその恐れは不信仰の確かなしるしである！」と。イエス様の死によって、私たちは死から解放されたわけではありません。私たちも死にます。しかし死の恐怖からは解放されている。イエス様はこのクリスマスに人として生まれたばかりか、死の領域までも行って下さり、そこもご自身の恵みのあふれる所と変えて下さったのです。

ある人はここで「主は悪魔を滅ぼした」とあるが、本当にそうだろうか、と問うかもしれません。ここの「滅ぼし」という言葉は、「無力にする」という意味です。確かに最後の審判の日まで、サタンの活動は許されていますが、今やイエス様の勝利によって、サタンの活動は著しく制限されています。ある人は次のようにたとえています。郵便配達人がある家のポストに郵便物を入れようとして門を入って行ったら、大きな犬が吠えながらこっちに向かって走って来る。もうこれは終わりだと思ってすくんだところ、次の瞬間に大丈夫であったことを発見した。なぜならその犬は鎖につながれていたからです。その鎖はかなり長くて、その犬には相当な自由がありましたが、自分が通る道までは来ることができない。まっすぐ玄関のポストに向かう分には、いくら大声で吠えられても心配はいらない。まさに主に従う者にとって、サタンはこのような力しか今や持っていないのです。1ヨハネ5章18節：「神から生まれた方が彼を

守ってくださるので、悪い者は彼に触れることができないのです。」もしその強暴な犬に噛み付かれ、ひどいけがを負うとしたら、それはあるべきところを越えて、興味本位に近づいた時だけ、すなわちイエス様の御言葉から外れて、自分から近づいて行った時だけなのです。

イエス様は悪魔に対して決定的な勝利を取め、私たちを死の恐怖から解放してくださいました。しかしイエス様の勝利の完全な現われは、なお最後の日を待たなくてはなりません。その日に向かって歩む私たちにとっての慰め深い真理が、今日の箇所後半にあります。二つ目のポイントとして見て行きたいことですが、それはイエス様があわれみ深い、忠実な大祭司となって私たちを助けて下さるということです。ここに大祭司イエス様が私たちにもたらす二つの祝福が示されています。一つは「罪のためのなだめ」です。この「なだめ」という言葉は、罪に対する神の怒りを前提にしています。これは神の正義から発する聖なる怒りであり、この怒りがなだめられるためには、罪に対する処置が正しくなされる必要があります。そのために旧約時代の祭司は、動物のいけにえをささげるように言われていました。しかしまことの大祭司なるイエス様は、旧約のいけにえが指し示して来たまことのなだめの供え物としてご自身をささげられたのです。神の御子なるお方の無限の価値を持つ犠牲は、無数の人々を救うことができます。これによって罪人に対する神の正義は満足させられます。この大祭司のささげものによって、私たちは神の怒りが取り除かれていることを確信し、むしろ神に受け入れられていることを感謝しながら、神に大胆に近づき、神と交わるまことの命に歩むことができるのです。

そしてもう一つのことは、日々の具体的な試みにおける助けです。18節：「主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることがおできになるのです。」よく大きな病気にかかった人が、同じ病気をした人からの訪問を受け、話を聞くと、ものすごく励まされると言います。やはり自分と同じ苦しみを経験した人から出て来る言葉や態度には、そういう人でなければにじみ出て来ない思いやりや共感があるのでしょうか。イエス様はこのクリスマスの時、人として誕生して生活されたがゆえに、人であることに伴う様々な弱さを経験されました。そしてあらゆる試みに耐え、私たちが味わう以上の苦しみを経験されました。時々、イエス様は罪を犯したことがないから、私たちが受けている試みや苦しみまでは分からないのではないかと言う人がいます。しかし実は逆です。試みを受けた時に一番楽なのは、その誘惑に屈することです。たとえばマラソンをしている時、苦しくなったらどうすれば良いでしょう。走るのをやめれば良いのです。途中棄権すれば、いつでもその苦しさから解放されます。しかしそこで走り続けるなら、なお苦しみ続ける道を選ぶことになります。イエス様はあらゆる試みに最後まで屈しなかったことにより、そこに伴う誘惑の力や苦しみを最大レベルで経験されたのです。イエス様はこのクリスマスの時、家畜小屋で生まれました。その誕生直後から命を狙われ、逃亡生活を強いられました。そして貧しい両親のもと、田舎のナザレで生活されました。公の生涯に入ってから、様々な人間の反抗を忍ばれ、神の子にふさわしくない扱いを受けました。そして生涯の終わりには、愛する弟子から裏切られました。またひどい言葉であざけられ、こぶしで殴られ、目隠しをされて頭をたたかれ、顔につばきをはきかけられもしました。また着せ替えごっこをしてもてあそばれ、散々嘲弄されたあげく、手足に釘を打たれ、十字架ののろいの木にぶら下げられました。主はそのような中で、人として正しく生きるために

どれほどの戦いと苦しみを経験されたか、誰が正しく想像できるでしょう。しかしそのようにして人が味わう苦しみを極みまで経験された方として、主はどんな悩みや戦いの中にある人も思いやり、あわれむことができるのです。またこの方は「忠実」とも言われています。すなわち神に対する働きを完全に成し遂げられた方であり、私たちはこの方に全幅の信頼を置くことができるのです。この大祭司はその執り成しによって、私たちを栄光に至るように導いてくださいます（10節）。イエス様はそこに必ず至るように、地上の私たちの歩みを力強く執り成し、導いてくださるのです。7章24～25節：「しかし、キリストは永遠に存在されるのであって、変わることはない祭司の務めを持っておられます。したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。」

私たちはこのクリスマスの時、イエス様にどのように感謝をささげるべきでしょうか。イエス様がこの時、私たちと同じ血と肉を取って来て下さったのは、死にまでも進んで下さるためでした。そのようにして、きよい神の御子が私たちの全生涯を歩いて下さって、そこを全部恵みに満ちた所へと変えて下さいました。またイエス様は人として歩まれることにより、私たちを深く理解し、執り成して下さるあわれみ深い、忠実な大祭司となって下さいました。この方こそを私たちは、神がお与えくださった本当のクリスマスプレゼントとして、感謝して自分の心の中心にお迎えしたいのです。そしてこのイエス様への感謝を、死を恐れない生活において、また私たちのすべての悩みや戦いを常にイエス様のところに持って行って日々助けをいただく生活において告白し、この方によって、確実に栄光に至るまで導いて頂けるという祝福に満ちた救いの道を歩む者でありたいと思います。